

名画の謎に挑む

松本侑壬子・ジャーナリスト

光と影の強烈な対比。ドラマチックな人物の表情。17世紀オランダの画家レンブラントの肖像画は一度見たら忘れられない。だが、画家本人の人生もその作品に劣らず劇的であり、その栄光と破滅の生涯は多くの謎に包まれている。

本作は、美術作家としても知られるイギリスの鬼才ピーター・グリーンナウェイ監督が、長年の研究を基に画家の最大の謎に挑む意欲作である。オランダの至宝と呼ばれ門外不出とされるその代表作『夜警』にこそその謎を解く鍵が隠されている—というのがグリーンナウェイ監督の視点である。

この絵が描かれたのは1642年、画家36歳の絶頂期だった。傲慢と孤独、反骨と野心、ビジネス結婚（＝妻が経営、夫が制作）の成功と愛情のあり方、正義感と策略…。一筋縄ではいかない画家自身の人間像が興味深い。舞台装置のような巨大な天蓋つきのベッドを中心にした日常生活、天井の高い広大なアトリエ、大テーブルでの社交と商談を兼ねたお祭り騒ぎの食事。そこには常に動き回る多数の男女登場人物の姿が、“レンブラント的”なアクセントの強い照明と映像で浮かび上がり、まるでレンブラントの動く絵さながらである。

『夜警』とは、当時のアムステルダムの市民軍の集団肖像画である。描かれた34人は、多くの泰西名画のようにじっとポーズをとっているのではなく、ひどく慌てているように見える。視線もばらばらだ。レンブラントは肖像画の依頼を受けると、その人物について詳細に調べたというが、絵の中央最前部にいる隊長と副隊長をはじめすべていわく付きの人物ばかり。金と縁故で地位を

買ったもの、脅されて殺人を犯したもの、児童虐待の孤児院長、なぜか画面の中央近くには目立つ光を浴びて、腰に二フトリをぶら下げ物言いたげな少女まで描かれている。すべての人物とその出で立ち、動きには意味があるのだという（余談ながらアムステルダムの特権機関によるその意味の“公式な説明”は詳細で、実に興味深い）。レンブラントは十分な底意をもって、時には不自然なまでの影や道具を使って、栄光の男たちの陰の部分を発表しようとした。「絵筆は画家の武器だ。何でもできる—侮辱も、告発も」という彼の言葉の通りに。

だが、莫大な報酬（妻サスキアは辣腕経営者だった）を払った市警団側が、この絵に黙っているはずがない。謀議の結果、いきなり暴力で復讐せず、もっと陰湿で執拗で長期にわたる破滅への道にレンブラントを追い詰めていくことを決める。

絵の完成前に、待望の一人息子を産んだサスキアが産後の肥立ちが悪く亡くなる。失って初めて知った妻との深い愛。だが嘆きの最中に、子守り兼娼婦として市警団員の愛人が送り込まれると、セックス・スキャンダル用にとの企みも知らず、易々と筆絡されて、性の快楽に溺れるレンブラントなのだ。事故を装って目を狙われるに及んで、孤立無援のレンブラントに寄り添ったのは…。

グリーンナウェイ監督は、レンブラントが肖像画の人物に対したように、レンブラントを結構突き放して描いている。同情や共感を感じられない。しかし興味尽きないのは、何といっても名画『夜警』が秘めた51もの謎と365年前の画家の人間像に挑む、監督の個性あふれる解釈と人間描写力だ。



英独仏など合作映画（139分）／ピーター・グリーンナウェイ監督

『レンブラントの夜警』

新宿テアトルタイムズスクエアほかにて公開中



©Nightwatching B. V. 2007